

第3次徳島市環境基本計画、地球温暖化対策推進計画

策定のための市民会議

第2回資料

【徳島市の環境に関する特性と課題】

と き 令和2年1月30日（木）

午後1時30分～午後3時30分

ところ 徳島市役所8階 801会議室

1 生活環境

現状・特性

(水質) ※別冊資料 p3～p4

- ・徳島市内には 138 本の河川が流れており、徳島市では河川の汚濁状況を把握するために、定期的に水質調査を実施している。
- ・市内では、吉野川、今切川、新町川水域及び勝浦川下流が河川として、勝浦川河口が海域として類型指定されているが、平成 29 年度はいずれの地点においても環境基準を達成している。
- ・調査を実施している河川の水質については、経年変化をみてもほぼ横ばいであり、市内の水質については概ね良好であるといえる。
- ・汚水処理人口普及率に関しては、下水道整備率は微増である。平成 13 年の浄化槽法改正により、単独処理浄化槽が新設廃止となったことから、合併処理浄化槽による汚水処理率が年々増加している。
- ・地下水については、水質汚濁防止法に基づき、年に 1～2 回、地下水質の調査を実施している。平成 29 年度は 11 地点で調査を実施し、全ての項目で良好な水質であった。

(大気) ※別冊資料 p4～p5

- ・一般的な大気汚染の状況を把握するため、一般環境大気測定局 4 箇所、道路周辺における状況を把握するための自動車排出ガス測定局 1 箇所の計 5 箇所が設置されている。
- ・二酸化硫黄 (SO₂)、二酸化窒素 (NO₂)、浮遊粒子状物質 (SPM) については、環境基準を達成しており、年間平均値も横ばい若しくは微減傾向にある。
- ・光化学オキシダントについては、全国的に環境基準の達成率が低く、徳島市内でも環境基準を達成していない。現在、国において越境汚染等の影響も含めた原因の解明や対策等について検討が進められている。
- ・有害大気汚染物質について、環境基準が設定されているトリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、ベンゼン、ジクロロメタンの全ての物質で環境基準を達成している。

(騒音・振動) ※別冊資料 p6

- ・一般環境騒音については、平成 29 年度では 4 地点で測定を実施し、いずれの地点も環境基準を達成している。
- ・道路交通騒音については、交通量の多い幹線道路沿いにおいて測定を実施している。全地点において要請限度を下回っているが、一部環境基準を達成できなかった地点がある。

(悪臭)

- ・悪臭防止法により、アンモニア、メチルメルカプタンなど 22 物質が特定悪臭物質として定められており、主要発生源である工場・事業場を対象に、定期的に立入調査や悪臭物質の濃度測定を行っている。
- ・悪臭防止法に基づき、常時監視の必要な市内の 4 事業所 (化製場・と蓄場・下水処理場・ごみ焼却場) に対し立入調査・試料採取・分析を行い、規制基準遵守等の必要な指導を実施している。

(有害化学物質) ※別冊資料 p7

- ・ダイオキシン類について、大気・水質等についての調査が実施されており、全ての地点で環境基準を達成している。
- ・特定化学物質の環境への排出量の把握及び管理の改善の促進に関する法律 (PRTR 法) に基づき届出が行わ

れている化学物質の排出・移動量を見ると、移動量（事業所外への移動）が排出量（事業所からの排出）を上回っており、排出の抑制のほか、適正な管理・処理が重要となっている。

（公害苦情）※別冊資料 p7

- ・公害苦情の件数は、平成 17 年度の年間 151 件をピークに減少傾向にあり、平成 29 年度は年間 61 件であった。
- ・徳島市に寄せられる公害苦情は、その原因のほとんどが法律等の規制対象とならないものである。
- ・ダイオキシン類対策により、事業所への規制強化や家庭ごみの焼却中止を呼びかけた結果、大気汚染に関する苦情が特に減少している。

課題

（水質）

- ・今後も良好な状態を維持していくために、環境基準を達成している項目については、引き続き監視等に努めるとともに、市民への啓発及び事業者への規制・指導に努める。
- ・汚水処理人口のより一層の向上のため、下水道整備、合併処理浄化槽の普及を進める。

※「川や水路の水のきれいさ」満足度、重要度ともに高。満足度は過去より増加。

※「家庭や事業所からの汚水処理の状況」満足度：低、重要度：高。満足度は過去より増加。

（大気）

- ・今後も良好な状態を維持していくため、環境基準を達成している項目については、引き続き監視等に努める。
- ・環境基準を達成できていない光化学オキシダントについては、情報収集に努め、濃度に係る注意報等を含め市民に発信を行う。

※「空気のきれいさ」満足度、重要度ともに高。重要度は過去より増加。

（騒音・振動）

- ・一般環境騒音については、発生源が多岐にわたり、法令による規制対象とならない場合もあるため、モラルやマナーなどの啓発に努める。
- ・道路交通騒音については、引き続き監視に努めるとともに、管理者とのより一層の連携を図る。

※「家の周りの静けさ」満足度、重要度ともに高。重要度は過去より増加。

（悪臭）

- ・悪臭に関する苦情を見ると、感覚公害であることから、一般飲食店や家庭が発生源となる場合がある。法令に基づく規制・指導は馴染まないものの、発生源者に対してモラル・マナーに関する指導・啓発を行う必要がある。

※「いやなにおいの少なさ」満足度、重要度ともに高。重要度は過去より増加。

（有害化学物質）

- ・有害化学物質に関する最新の情報を収集するとともに、各種法令に基づく制度を利用し、工場・事業場における化学物質の使用実態の把握に努め、適正管理を促す必要がある。

(公害苦情)

- ・公害苦情の早期解決に向けて、必要な現場調査を踏まえた指導・啓発を行うとともに、関係部署との速やかな連携、最新の対策施設等の情報収集に努める必要がある。

2 自然環境

現状・特性

(気象) ※別冊資料 p8

- ・徳島市は降水量が少なく、温暖な瀬戸内気候に属しており、年平均気温の平年値は 16.6℃、年間降水量の平年値は 1,454mm となっている。
- ・平均気温の経年変化を見ると、1940 年代と 2010 年代を比較すると、1.9℃の上昇となっている。

(地形・地質) ※別冊資料 p9

- ・徳島市は四国山地の東部にあたる山地と吉野川や勝浦川による平野、三角州、ファンデルタ、谷底低地などの平地から成り立っており、市域のほぼ中央には眉山が位置している。
- ・徳島市の地質は、平野を形成している沖積層と、山地を形成している堆積岩層に大きく分けられる。

(水系) ※別冊資料 p10

- ・市内には 138 本の河川があり、一級河川 26、二級河川 7、準用河川 3、普通河川 102 となっている。
- ・市域の北部は大部分が吉野川水系に属し、鮎喰川、新町川等の大小河川が網の目状に流れている。南部は吉野川水系の園瀬川、勝浦川水系となっている。
- ・徳島市の河川は、今切川、吉野川、新町川、勝浦川のいずれかの河川に合流し、紀伊水道に流れ込んでいる。

(動植物) ※別冊資料 p10～p11

- ・市域には河川・海岸から山地まで、多様な環境が存在し、その環境に適応した多様な動植物が見られる。
- ・徳島市は長い海岸線を有す海に面した地域であり、海よりに網状に流れる河川や水路が広い汽水域を形成しているため、生息が確認されている魚類については、汽水・海水性の魚類が多い特徴がある。
- ・市民アンケートの結果を見ると、「希少な野生生物の保護状況」について、現状の満足度、重要度はともに低く、市民の関心はそれほど高くないと判断できる。

(自然景観) ※別冊資料 p11

- ・市民アンケートでの「大切にしたい、または残しておきたい環境、場所、風景、風習」では、吉野川と眉山を挙げた人が多い。

課題

(動植物)

- ・郊外部における都市化の進展が進み、田園環境の減少が見られることから、豊かな生態系を育む基盤の保全が必要である。
- ・市中心部では眉山、城山、吉野川河口などで貴重な生態系を有しており、保全していくことが重要である。

・身近な自然環境の保全を図るためにも、市域に生息する動植物の生息・生育状態について、市民団体等と連携し、情報を収集するとともに、市民に発信していくことが必要である。

※「水辺や野山の生き物の生息状況」重要度：低。満足度は過去より増加。

※「希少な野生生物の保護状況」満足度、重要度ともに低。

※「自然観察会など、自然とふれあう行事に参加する」今後実行したいが過去より増加。

(自然景観)

・市民にとってシンボルとなっている眉山や城山、吉野川などの自然景観資源について、次世代に受け継いでいく必要がある。

・また、水と緑に囲まれたひょうたん島など、豊かな自然景観を活用していくことも必要である。

※「水と緑に囲まれた自然景観の保全」満足度：高。満足度は過去より増加。

3 快適環境

現状・特性

(土地利用) ※別冊資料 p12

・市域の土地利用は、自然的土地利用が大半を占めている。

・土地利用状況を見ると、山林、原野については概ね横ばいであるが、田畑は年々減少する一方、宅地は増加している。

(交通) ※別冊資料 p12～p13

・市内では、徳島自動車道や国道 11 号などの主要な道路が交差しており、市街地から放射状にのびる道路(国道 192 号、県道徳島鳴門線、県道徳島鴨島線など)で交通量が多くなり、混雑度が高くなっている。

・徳島市内の自動車保有台数は、平成 30 年度現在で 190,098 台となっており、近年は若干増加傾向にある。

1 世帯あたりの保有台数は 1.616 台であり、徳島県の 1.360 台、全国平均の 1.058 台を上回っている。

・鉄道の利用者数は概ね横ばいとなっているが、市営バスの利用者数は運行委託等の要因もあり、年々減少している。

(公園・緑化) ※別冊資料 p13

・市民一人当たりの公園面積は 12.6 m²で、全国都道府県の 12.0 m²、徳島県の 9.8 m²を上回っている。

・「徳島市緑の基本計画」に基づき、花と緑の空間整備、緑化に対する市民意識の高揚、花いっぱい運動の推進等を図っている。

・徳島市の都市公園等整備状況は、全国に比べ広域公園、特殊公園及び都市緑地の面積が比較的多くなっており、街区公園や近隣公園等の身近な公園の面積が少ない。

(歴史文化財) ※別冊資料 p13

・徳島市には多くの指定文化財(平成 30 年度現在 155 件)の歴史的文化的環境があり、風土と歴史が育てた独自の文化が形成されている。

・眉山や吉野川のような美しい景観、阿波踊りや人形浄瑠璃に代表される徳島の伝統文化以外に、魅力や価値

がありながら十分に認識されていないものを募集し決定した「とくしま市民遺産」を定めている。(45 件)

(都市環境) ※別冊資料 p14

- ・徳島市の中心市街地であり、新町川と助任川に囲まれた「ひょうたん島」では、水と緑のネットワーク構想により、水際公園等の整備が実施され、地域の資源である水と緑を生かした街づくりが行われている。
- ・徳島市の水を生かした街づくりについては、国土交通省の「水の郷百選」に選定されている。

課題

(土地利用)

- ・中心の市街地においても眉山や城山などの自然が残されていることから、今後の土地利用においては、自然との調和を考慮した土地利用を進めていくことが必要である。

(交通)

- ・交通渋滞の発生(交通量の増加、混雑度の上昇)は、大気や騒音などの周辺環境のみならず、地球温暖化への影響を及ぼす可能性が考えられるとともに、交通の利便性が損なわれるため、歩道・自転車道の整備や公共交通機関の利便性の向上を含めた総合的な交通施策について検討する必要がある。

※「歩道・自転車道の整備」満足度：低、重要度：高。

※「交通機関の利便性」満足度：低、重要度：高。満足度は過去より低下、重要度は過去より増加。

※「マイカー利用を避け、公共交通機関を利用する」実行するつもりはないが過去より増加。

(公園・緑化)

- ・豊かな快適環境を創出するためには、緑の空間を広げていくことが求められていることから、市民の緑化意識を高めるとともに、市民・事業者・行政が一体となって緑の空間形成を推進することが必要である。

※「身近な緑の多さ」満足度：高。

※「水や緑など自然に親しめる場の整備」満足度：高、重要度：低。

(歴史的文化財)

- ・直接環境とは関わりが少ないが、自然環境と一体をなしている歴史的環境については、文化財保護などの各種制度を活用し、情報の把握や保全が必要である。

(都市景観)

- ・街づくりにおいては、ひょうたん島周辺における水辺整備などのように、徳島市の環境資源である水と緑を生かした取組みを進めるとともに、人と自然との豊かなふれあいを確保することが必要である。

4 地球環境

現状・特性

(温室効果ガス) ※別冊資料 p15～p22

- ・2016年度に日本から排出された温室効果ガスは13億700万トンで、1990年度と比較すると約3500万トン(2.8%)増加、2013年度比で約1億300万トン(7.3%)の減少となっている。
- ・2013年度と比べて排出量が減少した要因としては、オゾン層破壊物質からの代替に伴い、冷媒分野においてハイドロフルオロカーボン類の排出量が増加した一方で、省エネ等によるエネルギー消費量の減少とともに、太陽光発電及び風力発電等の再生可能エネルギーの導入拡大や、原子力発電の再稼働等によるエネルギーの国内供給量に占める非化石燃料の割合の増加等のため、エネルギー起源のCO₂排出量が減少したこと等が挙げられる。
- ・2016年度に徳島市域から排出された温室効果ガスは199万7千トンで、1990年度と比較すると約5万2千トン(2.7%)増加、2013年度比で約44万4千トン(18.2%)の減少となっている。
- ・徳島市域の温室効果ガス排出量を部門別に見ると、1990年度と比較して家庭部門と業務部門、廃棄物部門の増加率が高くなっている。要因として、家庭部門は世帯数の増加、業務部門はサービス多様化に伴い、深夜営業を行う店舗の拡大や大型店舗の増加、廃棄物部門は産業廃棄物の増加が挙げられる。

(将来の温室効果ガス排出量) ※別冊資料 p22～p24

- ・本市の温室効果ガス排出量の将来推計を行ったところ、今後は増加していく傾向にあり、2030年度には242万1千トンと、2013年度比で0.8%の減少であると推計される。

(エネルギー使用量) ※別冊資料 p25

- ・市域での電力使用量は、2005年度をピークに減少傾向にあるが、これは暖冬等の気象条件や、東日本大震災を契機とした省エネルギー意識の浸透等によるものと考えられる。
- ・市民アンケートでは、「家庭での省エネルギーの取組み」の重要度が低い結果となっている。

(廃棄物) ※別冊資料 p26

- ・ごみ処理収集量は2001年度をピークに減少傾向にあるが、2016年度の一人一日当たりのごみ収集処理量は、全国平均920g/人・日、徳島県の946g/人・日に対し、1049.8g/人・日と多くなっている。
- ・市民アンケートの結果では、地球環境部門で最も重要な項目としてごみの減量・リサイクルが選択されている。
- ・事業者アンケートの結果では、事業者が事業活動に伴う環境問題として最も認識するのは「廃棄物の発生」となっている。

(環境保全活動の現状) ※別冊資料 p27

- ・市内を中心に活動を行っている主な環境団体について、活動内容を大きく区分すると「自然保護活動」「都市環境改善活動」「環境啓発活動」の3つに分類される。
- ・事業者自らが環境管理を行う活動として、最も有名なISO14001については、従業員の意識向上、環境負荷低減やコスト削減につながるものの、実際には資金不足や手間や時間の不足により、認証取得数は伸び悩んでいる。

課題

(温室効果ガス・エネルギー使用量)

- ・第2次徳島市地球温暖化対策推進計画は京都議定書の目標を踏まえたもので、2020年度までの取組みとなっているため、今後の取組みを検討する上で、パリ協定等、国際的潮流に留意する必要がある。
- ・徳島市の温室効果ガスの排出状況を見ると、家庭部門、業務部門で大幅に増加していることから、温暖化防止の意識啓発も含め、より一層の排出抑制に向けた取組みが必要である。
- ・省エネルギーや再生可能エネルギーに関する設備導入については、アンケート結果から市民・事業者ともに関心を示しているが、費用負担が大きい等の理由から導入に至っていないことから、これらの普及に関する施策を充実させる必要がある。

※「太陽光発電など再生可能エネルギーの導入」満足度、重要度ともに低。満足度は過去より増加、重要度は過去より低下。

(廃棄物)

- ・一人一日当たりのごみ収集処理量は減少傾向にあるが、全国や徳島県平均と比較して多く、より一層の削減を進める必要がある。
- ・ごみ減量、リサイクルや廃棄物の不法投棄に関して市民の重要度は高くなっているが、資源ごみ回収運動の実績は2001年度以降減少していることから、より実効性のあるごみ減量・リサイクルシステムの検討が必要である。

※「家庭からのごみの分別や出し方のマナー」満足度、重要度ともに高。

※「廃棄物の不法投棄対策の状況」満足度：低、重要度：高。満足度は過去より増加。

※「生ごみ、残飯などを堆肥化して肥料などに使っている」今後実行したいが過去より増加。

(環境保全活動)

- ・市民による環境保全活動は積極的に実施されているが、まだ一部にとどまっており、多くの市民の参画には至っていない。市・市民・事業者が協力して取組むネットワークづくりや、市民の活動を支援する仕組みについてより一層の整備が必要である。
- ・ISO14001等による環境管理システムを導入することは、事業活動にとってプラスの効果が高いことをアピールするとともに、より簡易に取り組むことができるエコアクション21を含め、事業者に対する普及啓発や情報提供に重点を置く必要がある。

※「市民一人ひとりの環境に対する意識」満足度：低、重要度：高。

※「環境教育・環境学習の状況」満足度、重要度ともに低。

※「イベントや取組みなど環境情報の入手状況」満足度、重要度ともに低。重要度は過去より増加。

※「地域の美化などの環境保全活動の状況」満足度、重要度ともに低。

※「地域の清掃・美化活動に参加する」今後実行したいが過去より増加。